

# ローマ帝国と原始キリスト教

— その迫害の性格について —

谷 栄一郎

はじめに

- I ユダヤ教とキリスト教
  - II ギリシア人の宗教
  - III ローマ人の宗教
  - IV ドルイド教の禁圧
  - V 皇帝礼拝
  - VI イエスの受難
  - VII パウロの場合
  - VIII クラウディウス帝下のキリスト教弾圧
  - IX 「暴君」ネロ
  - X ネロ帝下のキリスト教迫害
  - XI 小プリニウスの手紙
- まとめ

はじめに

ローマ帝国下でのキリスト教迫害については世界史のどの教科書にも取り上げられ、「クオ・ヴァーディス」など多くの小説の題材にもなり、映画化までされているので一般には広く知られている。しかし、その実態となると、ことは簡単ではない。新約聖書はユダヤ人から受けた迫害については異常に詳しいが、ローマ当局から受けたそれについては言葉を濁している。イエスの裁判におけるピラトの描写に見られるようにローマ側の責任をユダヤ人に転嫁しようとの意図が顕著である。1世紀に書かれた異教側の文献でイエスやキリスト教に言及しているものは残念ながらほとんど何もない。ヨセフスの「ユダヤ古代誌」にはフラウィウス証言(testimonium Flavianum)と呼ばれる有名な箇所があり、<sup>(1)</sup>ここで確かにイエスについての短い言及があるが、「彼はキリストであった」というようなキリスト教徒以外の者が決して口にしないような言葉があるのでこれはキリスト教徒による挿入に間違いのないと思われる。ヨセフスは洗礼者ヨハネやイエスの兄弟ヤコブの受難に言及

しているが、これはローマ人によるものではない。異教徒のローマ人によるキリスト教徒迫害についての最も重要な証言は歴史家タキトゥスの「年代記」にある紀元64年のローマの大火についての記録と、<sup>(2)</sup>小プリニウスの「トラヤヌス宛書簡」の中のキリスト教徒の裁判を扱った箇所<sup>(3)</sup>でどちらも2世紀の始めに書かれている。タキトゥスについてはしばらくおくとして、小プリニウスは小アジアに来て始めて出くわしたキリスト教徒の裁判の様を書簡の中で詳しく報告している。それにはキリスト教徒と出会った彼の驚きとためらいが強く出ている。小プリニウスは最も博学なローマ人と言われた大プリニウスの甥であり、叔父の突然の死に際して、彼の養子としてその全財産と膨大な著作を受け継ぐことになった。小プリニウス自身弁論家として長年に渡って法廷で活躍しておりローマの裁判については知悉していたものと思われるが、その彼にしてキリスト教の裁判についてまったく無知であったとは、どういうことか。1世紀のローマ本国においてキリスト教徒の裁判などほとんど行われていなかった、いやキリスト

教自体についてすら西方ではほとんど何も知られていなかったことを示していると思われる。一方エウセビオスを始めとするキリスト教側文献はネロ帝とドミティアヌス帝下での迫害を伝えている。ネロ帝下の迫害については異教徒側のタキトゥスの他、スウェートニウスも伝えているので、迫害があったこと自体は疑問の余地はないが、タキトゥスの記述には他の史料と合わない点が種々あり、迫害の程度、性格についてははっきりしない点も多い。ここでは紀元1世紀におけるローマ帝国によるキリスト教徒迫害がなぜ起きたのかについて考察してみたい。

## II ユダヤ教とキリスト教

まず、キリスト教とその元になったユダヤ教の特徴とその両者の相違について簡単に見ておかなければならない。

ユダヤ教は律法の宗教とも言うべく戒律の数が多い。キリスト教はその発展過程においてその大部分を放棄したが、いわゆる十戒は保持された（もちろん、安息日を土曜日から日曜日に変更するということはあったが）。ギリシア・ローマの異教との関係で重要なのは偶像崇拜禁止を唱った第一戒である。旧約聖書によればこの戒律の本文は次のようになっている。<sup>(4)</sup>

「汝、我面の前に我の外に何物をも神とすべからず。

汝、おのれのために何の偶像をも彫むべからず。また上は天にあるもの、下は地にあるもの、ならびに地の下の水の中にあるものの何の形をもつくるべからず。これを拝むべからず。これに事うべからず。われエホバ汝の神は妬む神なれば我を憎むものにむかいては父の罪を子にむくいて三、四代に及ぼし、我を愛し、戒めを守る者には恵みをほどこして千代にいたるなり。」

どこかの国の憲法の条文を連想させるが、一切の偶像はこれを崇拜してはいけないことが規定され、またそのため、偶像を作ることも明確に禁止されている。現在のカトリックはイエス像、マリア像、諸聖人像を教会に祭るが、原始キリスト教は十戒の戒律を文字どおり守り、いっさいの偶像を祭らなかつた。プロテスタント教会が偶像を祭らないのはこの原始キリスト教会の伝統に従っているのである。さてここでキリスト教とユダヤ教の違い

を見ておかなければならない。キリスト教はイエスを救世主メシアと信じ、イエスによりすべての人の罪が許されとする贖罪の思想とイエスによる最後の審判が迫っているとする終末論に特徴がある。最初、律法を守るユダヤ人キリスト教徒と律法についてはゆるやかな態度を取る異邦人キリスト教徒の間で対立があったが、前者がユダヤ戦争で壊滅的打撃を被るに及んで後者が主導権を握り、律法を否定してユダヤ教徒と対決するに及んでユダヤ教から完全に独立したキリスト教が成立した。ローマ人の側から見るともちろん最初のうちは両者を区別できなかったに違いない。キリスト教徒共同体が主としてユダヤ人から成っていて、服装、風習もユダヤ教徒から分離していない間は外観から見分けはできない。しかし、異邦人キリスト教徒が増え、律法が放棄されてくると、ユダヤ教徒との相違が目だってくる。ユダヤ教徒は紀元前1世紀からローマにも多数定住しており、豚肉を食べないことや、安息日の習慣などは一般にも知られていたようである。ユダヤ教は偶像崇拜はしないが、ギリシア・ローマの宗教と同じように神殿、祭壇を持ち、犠牲獣を捧げる習慣を持つ民族宗教であったので、カエサル以来ローマ人から公認されてきた。

## III ギリシアの宗教

ギリシア人の宗教はゼウスを主神とする多神教であるが、anthropomorphism（神人同形説）に特徴がある。ホメロスによると神々は人間よりは大きい、人間とまったく同じ形をしており、アンブロシア（神饌）を食べ、ぶどう酒の代わりにネクタル（神酒）を飲み、オリュンポスの宮殿で人間のように供宴をよく楽しんでいた。喜怒哀楽の感情も人間と同じで、互いに妬んだり、争ったりもした。人間との根本的な違いは彼らが不死だということ、それゆえに人間から敬われたのである。ギリシア人は造形美術の天才で、人間的な神々の像を多く作り、礼拝した。神々と人間の関係はギブ・アンド・テイクで、人間は神々に祈願し、願がかなうと願の時に誓った通り、犠牲を行ったり、奉納物を収めたりした。神々の意志は占いによって知ることができると考えられ、重要な行事の前には必ず占いで神意を伺った。神託も盛んで、戦争や植民を行う時などポリスとして神託を

伺った。

### Ⅲ ローマ人の宗教

もとは農民であったローマ人が礼拝していたのは農業に結びつく数々の神々であったが、先ずエトルリア人を通して、次いで直接ギリシア人からギリシアの神々が受け入れられる。ギリシアの主神ゼウスとローマの主神ユピテルは共通の語源に遡る天空神であるが、これにならって他のオリュンポスの神々もローマの神々に対応させられ、ギリシア神話の体系がそっくりローマに移入されることになった。かくて海の神ポセイドンはネプトゥヌスになり、愛の女神アプロディーテはウェヌスになった。ローマ人の礼拝様式はギリシアのそれとよく似ているが、占いについてはエトルリアの影響が大きく、鳥占い、内臓占いが重視された。ローマ人はもともと外来の神々の受け入れに対して開放的であった。ローマ帝国は相次ぐ戦争に勝利することにより、地中海世界の支配権を手に入れたのであるが、ある敵の都市を陥落させるに当たって、その神の守護神を勧請することをよく行った(いわゆるevocatio)。<sup>(5)</sup> 敵の神々の神殿といえども、むやみに略奪することは許されなかった。第2次ポエニ戦争でのメンミウスのエピソードはよい例である。スキピオの副官メンミウスはカルタゴ側に附いたロクリーの町を略奪し、プロセルピナの神殿の財宝にまで手をつけた。ロクリー人はがローマの元老院に訴えると、元老院は直ちにメンミウスをローマに召喚し、プロセルピナの神殿には以前に倍する宝物が奉納されることになった。<sup>(6)</sup> また同じく第2次ポエニ戦争末期、ハンニバルのイタリアからの退散祈願のため、小アジアから大地母神キュベレーの黒石を取り寄せ、ローマに祭った。これがMAGNA MATER礼拝の起源である。日本では仏教伝来に際し、物部氏が「蕃神の礼拝は国神の怒りを招く」と強行に反対したことが伝えられているが、新しい神の礼拝が在来の神々の怒りを買うという考え方はほとんどなかったようである。ただ国家として無制限に諸宗教を受け入れていたわけではなく、ローマにはPontificesという神官団があり、いっさいの神事を監督していた。ローマ人に受け入れられなかった神々でも属州での礼拝はほとんど弾圧を受けなかった。ただ公共の秩序を乱すような事態が起こっ

たような場合、話は別で、官憲は当事者を処罰、信徒たちを追放するなどの処置に出ている。ヨセフスの伝える所によると、ティベリウス帝は貴婦人パウリーナをめぐる醜聞で、関係したイシス教の祭司たちを十字架に架け、神殿を破壊し、イシス神像をティベリス川に投げ捨てさせたという。<sup>(7)</sup> またフルウィアというユダヤ教への改宗者の神殿への献納品を数人のユダヤ人がだまし取ったことでローマの全ユダヤ人が追放されたという。<sup>(8)</sup> 各民族がその民族内で礼拝を行うことは許されていたが、ローマ人が被害を受けているという訴えがあると当局は厳しく介入したようである。

### Ⅳ ドルイド教の禁圧

ほとんどすべての民族宗教が認められた中で、ガリアで盛んであったドルイド教が禁止されたのは注目に値する。ドルイド教は靈魂不滅、輪廻を説く宗教で、その僧たちは祭儀を執り行うだけでなく、公私のあらゆる争い事を決裁した。<sup>(9)</sup> ローマ人の反感を買ったのはその呪術と人身御供である。アウグストゥス帝の時、ローマ市民に禁じられ、ティベリウス帝の時、予言者と医者が弾圧を受け、クラウディウス帝に至って全面禁圧となった。<sup>(10)</sup> この宗教では蛇の卵が特に珍重され、スウェートニウスによると、訴訟の時、懐に卵を隠し持っていた1ローマ市民がクラウディウス帝によって処刑されたという。<sup>(11)</sup> 人身御供はローマ人から見ると野蛮極まりないが、この宗教がガリア人の間だけに留まっておればあるいは全面的禁止にまでは至らなかったように思える。ここでもかなりのローマ市民が巻き込まれる事態になって、介入が行われているようである。

### Ⅴ 皇帝礼拝

ローマでは長い間個人を神として崇拝するという習慣はなかったが、東方においてはアレクサンドロス大王の後継者たちがしばしば神として崇められていた。ユリウス・カエサルが暗殺されてから4カ月後、彗星が現れ、カエサルは星になったと信じられ、元老院によってディーウス・ユーリウス(神なるユーリウス)という神として祭られることが決められた。アウグストゥス自身好んでDivi filius(神の子)という呼称を使った。アウグストゥスも死後、Divus Augustus(神なるア

ウグストゥス)と呼ばれ、神格化された。アウグストゥス以後の皇帝たちも悪い皇帝たち(例えばネロ)を除き、死後、神として祭られることが慣習となった。アウグストゥスはローマとイタリアでは自分を神として崇めることを禁じたが、東方属州では「ローマとアウグストゥス」の神殿の建設を許した。帝制初期において皇帝崇拜が一般に強制されるということにはなかったが、皇帝に対する忠誠を示す儀式においては皇帝像は重要な役割を果たしていた。軍旗には皇帝像が付属していて、属州ユダヤにおいてはしばしばこれが騒動の原因となった。<sup>(12)</sup>キリスト教も偶像崇拜を強く否定している以上、皇帝崇拜が強化されれば弾圧を受けざるを得なかった。ヨハネ黙示録で「あらゆる種族、民族、言葉の違う民、国民を支配する権威が与えられた」「獣」のことが言及され、「獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。」とあるが、<sup>(13)</sup>これは皇帝崇拜を拒絶してキリスト教徒が処刑されたことを示しているのであろう。

## VI イエスの受難

イエスの受難については福音書に詳しく語られていて、これにはありえない描写が多く、実際に何が起きたのか、今日推定することは非常に困難である。伝統的にキリスト教徒はイエス受難の責をユダヤ人に負わせ、ローマ人を免責してきたが、イエスがユダヤ人の刑罰である石打の刑ではなく、ローマ人が反乱者に対して科す刑罰である十字架刑が執行されたことはイエスがローマ人から反逆者と宣告されたことを示すと思われる。そもそも残忍無比な総督として知られるピラトがユダヤ人の群衆の圧力に負けてイエスの断罪を余儀なくされたという福音書の記述はユダヤ人を憎むキリスト教徒による創作以外の何物でもないであろう。イエスの言動はユダヤ人支配層にとっては確かに脅威であったかもしれないが、ローマの官憲の目にはどう写ったのであろうか。イエスはパリサイ人に激しい非難を続けているが、この成りゆきでイエスの弟子たちとパリサイ人の間で激しい衝突が起きたのかもしれない。イエスの弟子の中には過激派のゼーロータイ(熱心党)の者もあり、武器を携えている者もいたようである。石の投げ合い、乱闘から流血の事態が発生するとローマ官憲は介入せざるを得ないであろう。イエスについ

て来ていた一人の若者が「亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった」というような伝承はこの時の混乱を物語るものであろう。<sup>(14)</sup>ユダヤ人指導層が総督ピラトに訴え出たイエスの罪状は律法違反や流神罪ではないであろう。群衆に武装させ、神殿破壊を企んだというようなものであったかも知れない。ヨセフスは似たような事例を多数紹介している。ファドスが総督の時、テウダスというペテン師が現れ、ヨルダン川を2つに分けて渡れるようにしてやると言って群衆を扇動したという。ファドスは騎兵大隊を差し向け、多数を殺すか、捕縛し、テウダス自身も斬首された。<sup>(15)</sup>またフェリクスが総督の時、エジプト人のペテン師が自分を予言者と信じ込ませて多数の群衆を荒野からオリーブ山へ連れていき、そこからエルサレムに乱入しようとした。フェリクスは重装歩兵を率いて迎え撃ち、粉碎した。<sup>(16)</sup>ローマ人から見ればイエスもこのようなペテン師、偽予言者の一人に見えたのかも知れない。福音書にある「この神殿を壊してみよ。三日で建て直して見せる。」<sup>(17)</sup>というイエスの言葉はあるいは本当かも知れない。これを文字通りに取れば、神殿破壊を唆したと言えるであろう。

## VII パウロの場合

使徒行伝においてルカは迫害はユダヤ人から来るものとして描いているので、ローマ当局からの迫害はわかりにくくなっている。パウロがピリピに滞在している時、占い女の主人から「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも実行することも許されない風習を宣伝しております。」とあって当局に訴えられ、投獄される。<sup>(18)</sup>この「ローマ帝国の市民には受け入れることも実行することも許されない風習」とは何のことか。このときはまだローマ人にはユダヤ教徒とキリスト教徒の相違がわからず、パウロもユダヤ教の風習を広めようとしたのだと解釈されている。「群衆も一緒になって二人を責めたた」<sup>(19)</sup>というのは何か特にローマ人の植民者を憤慨させることをパウロが言っていたことを推測させる。純粹のローマ人には回りに住むギリシア人に比べてローマに対する忠誠心が強く、ローマの神々に対する父祖伝来の礼拝を固く守っていたのではなかったか。パウロはここでも「偶像などは

神ではない。」と強弁してローマ人たちの怒りを買ったのではないかと思われる。この推測はエペソスでの騒動の記述においてはっきりする。パウロがエペソスに滞在している時、アルテミスの神殿の模型を作る銀細工職人がパウロを中傷した。「あのパウロは『手で造ったものなどは神ではない』と言って、エペソスばかりでなくアジア州のほとんど全地域で、多くの人を説き伏せ、たぶらかしている。これでは、我々の仕事の評判が悪くなってしまふ恐れがあるばかりでなく、偉大な女神アルテミスの神殿もないがしろにされ、アジア州全体、全世界があがめるこの女神の御威光さえも失われてしまうだろう。」

「これを聞いた人々はひどく腹を立て、『エペソスのアルテミスは偉大なり』と叫びだした。そして、町中が混乱してしまった。」 ついで野外劇場で集会が開かれたが、町の書記官が群衆をなだめてことなきを得たという。<sup>(20)</sup> 一方、第1コリント書によると、パウロは「エペソスで獣と戦った」<sup>(21)</sup>と書かれている。パウロはローマ当局からひどい迫害を受けたのかも知れない。ルカの護教的意図にも関わらず、パウロの宣教が偶像崇拜をする異教徒から強い反発を招いたことが推測される。

### Ⅷ クラウディウス帝下のキリスト教弾圧

スウェトニウス「クラウディウス帝伝」xxv,4  
「帝はユダヤ人がクレストゥス（Chrestus）を扇動者として絶えず反乱を起こしたのでローマから追放した。」（49年頃）

このクレストゥスはChristus（キリストのラテン語形）の別形であり、ローマでキリスト教徒とユダヤ人の中で衝突があったことを示唆するものと考えられている。使徒行伝にパウロがコリントスで出会ったアキラとプリスキラというユダヤ人の話が出てくるが、この二人は「クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。」<sup>(22)</sup>と書かれており、このスウェトニウスの記事と符合している。すでにこの時期のローマにキリスト教徒の共同体が出来ていたこと、しかし、その共同体は主としてユダヤ人からなっていたらしいこと、ローマ人から見るとまだキリスト教徒とユダヤ教徒の区別はついていなかったことがわ

かる。

### Ⅸ 「暴君」ネロ

17才で皇帝となったネロはストア哲学者セネカと有能な親衛隊長ブルスの補佐を受けて、先帝クラウディウスの行き過ぎを改め、その最初の5年間は最善の御代として称えられるようになった。しかし、ポッパエアが登場するころから2人の影響力を離れ、生まれつきの残忍な本性を現し始めたと一般に言われている。即ち、ポッパエアとの結婚に反対であった母アグリッピーナを先ず殺害し、次いで先帝の娘オクタウィアを離婚してから殺した。ピーソアの陰謀に際してはセネカや叙事詩人ルーカーヌスまで自殺せしめた。ネロの常軌を逸した行動はタキトゥスやスウェトニウスに詳しい。ただユウェナーリスの風刺詩などを読むとネロが保守的なローマ人に憎まれたのは芸術、特に詩作に凝り、頻繁に劇場で自作の詩の朗読をやったり、悲劇俳優として衣装を着て舞台に出るなどの振る舞いに対する嫌悪が大きかったのではないかという気がする。<sup>(23)</sup>

### Ⅹ ネロ帝下のキリスト教迫害

キリスト教徒に対する迫害として最も有名なタキトゥス「年代記」XV,44を取り上げよう。

64年、ローマに大火が起こり、市の大部分が灰燼に帰した。ネロは大火を見物しながら「トロヤの陥落」の歌を歌ったという噂がささやかれたが、さらにネロが火をつけさせたという風評が広まった。

「ネロはこの風評をもみ消そうとして身代わりの被告をこしらえ、一般に人々がキリスト者と呼ばれ、その隠された罪のゆえに憎まれていた人々に大変手の込んだ刑罰を加えた。この一派の呼び名の起因となったクリストゥス（キリスト）なる者は、ティベリウス帝の治世下に総督ポンティウス・ピラトによって処刑されていた。その当座は、この有害極まりない迷信も一時鎮まっていたのだが、最近になって再び、この害悪の発生地ユダヤにおいてばかりでなく、世界中からもすごく破廉恥なものがことごとく流れ込んで来てはやされるこの都においてすら、はびこってきたのである。そこでまず、（信仰を）告白していた者が審問され、ついでその者らの申し立てにもとづき、実におび

ただしい人々が放火罪、というより人類憎悪の罪に定められたのである。彼らは殺されるときなぶり者にされた。すなわち彼らは獣の皮を被らされ、犬にかみ裂かれて死んだ。あるいはまた十字架に釘付けにされ、あるいは燃えやすいものを塗りたくられ、日没後、夜の灯火代わりに燃やされた。ネロはこの見せ物のため、カエサル家の庭園を提供し、そのうえ戦車競技まで催して、その間中、戦車御者の扮装で民衆の間を歩き回ったり、自分でも戦車を走らせたりした。そこで人々は憐憫の情を起こした。なるほど彼らは罪人であり、最もきびしい刑罰に値する。しかし彼らが殺されたのは公共の福祉のためでなく、ネロ一個人の残忍性を満足させるためだったように思われたからである。」(秀村欣二訳)

この史料には幾つか問題点がある。

1. そもそも64年というこの時期にローマにおびただしいキリスト教徒の共同体などがあつたであろうか。ローマの祭儀に参加しないというのならユダヤ人にもあてはまり、ユダヤ人が多数ローマに定住していたことはよく知られている。数の上で目だつのはユダヤ人のほうではなかったか。この時点でユダヤ教徒とキリスト教徒の区別がローマ人にできたのか。
2. 400年前後のキリスト教作家スルピキウス・セウェールズを除いて、タキトゥス以外の史料(キリスト教側文書も含む)ではローマの大火とキリスト教徒弾圧がまったく結び付けられていないこと、特にスウェートニウスではネロの業績の一つとして「新奇で有害な迷信の徒キリスト教徒が処罰を受けた」<sup>(24)</sup>と記されているだけである。
3. 熱烈な共和主義者であるタキトゥスはネロに限らず、すべての皇帝の事績を悪意を持って書いており、この箇所も事実を歪めている可能性がある。タキトゥスもこの箇所の少し前の所でネロの必死の消火活動と被災者救済に触れている。

ただタキトゥスがまったくの創作、捏造をしているとも考えにくい。後代のキリスト教徒が大火と迫害を分けて書いてあるのは、「放火犯として疑われた」ことが宣教にマイナスになると考えてのことかも知れない。ここでは最初の「ネロはこの風評をもみ消そうとして身代わりの被告をこし

らえ」の所はタキトゥスの悪意ある推測とし、以下の部分はキリスト教徒の数に関して誇張はあるものの信憑性があるものとし、キリスト教徒断罪の理由について考えてみたい。

タキトゥスは「放火罪、というより人類憎悪の罪に定められた」と書いている。「人類憎悪の罪」とは女神ローマと皇帝の守護神の礼拝を始めとするローマの多神教祭儀への参加の拒否を指すと思われるがユダヤ教徒もいっさいの偶像崇拜を拒んでいた。ユダヤ教はカエサル、アウグストゥス以来公認されていたのであるが、祭祀不参加というだけでは両者を区別できない。タキトゥスはまた「隠された罪のゆえに憎まれていた」と書いている。この隠された罪とは後代の史料によると人身御供や近親相姦を指すと考えられる。ぶどう酒をイエスの血、パンをイエスの肉とする正餐の儀式がこのような噂を呼んだものと思われるが、オリエントからはバックスやイシスを始めとする多数の秘儀宗教がローマに流入しており、何故この時期、キリスト教徒だけが迫害の対象になったのか。

真の犠牲者はユダヤ人であったが、タキトゥスはユダヤ人とキリスト教徒を混同したのだという説がある。別の説によればユダヤ人もキリスト教徒も犠牲になったが、ユダヤ人が犠牲になったことは忘れられたという説もある。さらに最初はユダヤ人に疑いがかけられたが、ネロの皇妃ポッパエアによってキリスト教徒に転嫁されたとする説もある。<sup>(25)</sup>ただこれらの説はユダヤ人に対する迫害を詳しく記録しているヨセフスがまったく何も記録していないという事実を説明できない。59年頃パウロがローマに来ており、彼の熱弁によりローマのキリスト教徒が急増したことは充分考えられる。前に見たように「偶像などは神ではない」との主張は敬虔なローマ人の激しい怒りを買ったであろう。確かにユダヤ教徒も偶像を認めないが、ユダヤ人の偶像崇拜禁止はユダヤ人に対してのみ適用されるもので、異教徒のローマ人の偶像崇拜を公然と非難することはしなかった。この点が特にキリスト教徒が憎悪される原因であったように思える。スウェートニウスの「新奇で有害な迷信」という言葉やタキトゥスの「有害極まりない迷信」という言葉はこう解釈してこそ納得が行く。ユダヤ教はユダヤ人だけの民族宗教に過ぎなかったが

キリスト教はパウロの働きにより全人類のための世界宗教になっていた。外観においてもユダヤ人は「衣服の四隅に房」<sup>(26)</sup>をつけているので、律法を捨てたキリスト教徒から簡単に見分けが出来たと思われる。

もう一つ注目すべきなのは、タキトゥスの上記の引用文のすぐ前に出てくる神々への宥めの儀式である。ここも引用しておく、

「やがて神々の怒りを静めるための犠牲が捧げられ、シビュラの予言書が参照された。それに基づき、ウルカーヌス、ケレース、プロセルピナへの祈願がされ、貴婦人たちによって先ずカピトリウムの丘でユーノーの怒りを宥める儀式が営まれ、次いで近くの海から海水をすくって女神の神殿と神像に振りかけられた。さらに既婚の婦人により神々の宴が張られ、宵祭が祝われた。」

この文に続いて「それでもネロがやったという噂は消えなかった」という一文が続き、問題の引用文が来るわけであるが、実際に事の順序として、神々の怒りを静める祭祀に続いてすぐキリスト教徒の逮捕がなされたという感じが強くする。この両者がもし関連していると考え、quos per flagitia invisos 「罪の故に憎まれていた人々」の罪とは、神々の怒りを買う行動であり、神聖冒瀆 (sacrilegium) であった可能性がある。

なぜ放火犯という告発がされたかであるが、当時のキリスト教徒には世の終末、イエスの再臨への希望が高かったことが大に関係しているのではなかろうか。「現在の天と地とは、火で滅ぼされる」<sup>(27)</sup>と信じるキリスト教徒にとってローマの突然の大火はまさしく世の終末と思われたのかも知れない。「汝ら悔い改めよ。天の国は近づいた。」<sup>(28)</sup>と叫び、ローマの神々を冒瀆する言葉を吐くキリスト教徒を見て、「神殿に火を付けたのはこの連中だ」とローマ人が考えても不思議ではない。いったん逮捕されれば、放火の罪は立証されなくても「人類憎悪の罪」での断罪は容易であろう。ネロは絶好のスケープゴートが出来たと喜んだかも知れない。見せしめというより見せ物としての処刑はユウェナーリスも言及しているので恐らく本当であろう。

## XI 小プリニウスの手紙 (X,96,97)

小プリニウスのトラヤヌス宛書簡は属州総督か

ら皇帝への公式書簡であり、キリスト教徒について書かれた異教徒の史料の中では最も信頼できるものである。ここではタキトゥスとの関連でキリスト教徒の罪状だけ考察することにする。プリニウスは初めてのキリスト教徒の裁判に戸惑い、キリスト教徒という名前に付随する悪事が罰せられるべきなのか、キリスト教徒であること自体 (nomenipsum) が処罰の対象なのか、トラヤヌスに確認する一方で、キリスト教徒であると告白した者は処刑した。見切り発車のようなもので、小プリニウス自身、キリスト教徒であること自体が処罰に値すると考えていたようである。匿名の告発により多数の者がキリスト教徒であるとの疑いで審理されることになったが、調べてみると名前に付随する悪事 (flagitia cohaerentia nomini) は何も発見されなかった。しかし「神殿が荒廃し、祭儀がおろそかにされ、犠牲の肉に買い手がなくなかった」のはキリスト教徒の所為であることをほのめかしている。トラヤヌスはプリニウスの取った処置を承認する一方で、匿名の告発は採用しないよう命令した。この史料からわかることは、この二世紀始めの時点で、キリスト教徒であること自体が処罰に値すると考えられていたこと、さらに異教の祭祀衰退とキリスト教が関連づけられていたことである。

### まとめ

ローマによる原始キリスト教徒の迫害についての史料は非常に乏しい。新約聖書はユダヤ人に対する憎悪に満たされており、迫害はすべてユダヤ人より来て、ローマ当局はキリスト教徒をその迫害から守ろうとしているかのごとき書き方をしている。他方、紀元1世紀から2世紀始めにかけて一般のローマ人はキリスト教にはほとんど関心を払わなかった。各民族の風俗、慣習を尊重することを統治の基本方針としてきたローマ当局は各民族の宗教も出来るだけ保護した。ただ一方でローマ市民の保護は帝国の最大関心事であり、ローマ市民が外来の宗教により何らかの被害を被った場合看過できなかった。ローマの伝統宗教は外来の宗教に寛容であったが、バックス、イシス、ミトラと言ったオリエントの秘儀宗教も他の宗教に対して寛容で、ローマの伝統宗教を認めながら、こうした東方の宗教に同時に入信することが許され

た。ユダヤ教とキリスト教の場合は別で、当時の他の宗教には全く見られない不寛容さを持っていた。ギリシア・ローマの神々を認め、かつユダヤ教の神もしくはキリスト教の神を認めるということは全く許されていなかった。ディアスポラ（離散）のユダヤ人たちは異教徒のギリシア人から絶えず迫害を受けたが、それはユダヤ人たちがギリシアの神々を認めず、皇帝崇拜も拒否し続けたからである。ローマ当局も民族宗教としてはユダヤ教を公認していたがローマ市民の入信は度々禁止している。キリスト教徒の場合もギリシア・ローマの神々を認めず、皇帝礼拝を拒否していたため一般民衆から迫害に遭う恐れは絶えずあった。パウロの宣教は熱烈であり、彼の説法の激しさは以後の弟子たちによって受け継がれたのではないか

と思える。ユダヤ教徒は多神教を激しく論難することはなかったが、キリスト教徒は多神教の信仰を徹底的に論駁しようとしたためローマ当局から疑いの目が向けられたのであろう。ローマの安泰はローマの神々の賜であるとするローマ当局にとって、キリスト教徒のため異教の祭儀が等閑にされることは許されなかった。64年のネロによる弾圧も警戒の目を光らせていたローマ当局が民衆の告発を待って敏速に動いたというのが真相であろう。ローマ教会は壊滅的な被害を受け、以後ローマでは下層階級以外にはほとんど広まらなかったようである。ただ弾圧はローマ市に限られたため、根拠地の小アジアでは勢力は温存され、当局に気づかれることなく広まっていく。

#### 注

(1) ヨセフス『ユダヤ古代誌』XVIII,63-64

(2) タキトゥス『年代記』XV,44.

(3) 小プリニウス『書簡』X,96-97.

(4) 『出エジプト記』XX,3-6.

(5) G.Wissowa, *Religion und Kultus der Römer*, München, p.44.

(6) Titus Livius, *Ab Urbe Condita*, XXIX,8.

(7) ヨセフス『ユダヤ古代誌』XVIII,65-80.

(8) *ibid*, XVIII,81-84.

(9) cf. Caesar, *De bello Gallico*, VI,13-14.

(10) Suetonius, *Claudius*, XXV.

(11) Plinius, *Naturalis Historia*, XXIX,53-54.

(12) cf. ヨセフス『ユダヤ古代誌』XVIII,55-59.

(13) 『ヨハネ黙示録』XIII,7;15.

(14) 『マルコ』XIV,51.

(15) ヨセフス『ユダヤ古代誌』XX,97f.

(16) ヨセフス『ユダヤ戦記』II,261f.

(17) 『ヨハネ』II,19.

(18) 『使徒行伝』XVI,20.

(19) *ibid*, XVI,22.

(20) *ibid*, XIX,23-40.

(21) 『コリント I』XV,32.

(22) 『使徒行伝』XVIII,2.

(23) ユウェナリス『風刺詩』VIII,211f.

(24) Suetonius, *Nero*, XXV,4.

(25) H.Furneaux, *The Annals of Tacitus* vol.II, Oxford, p.425.

(26) 『申命記』XXII,12.

(27) 『ペテロの手紙II』III,7.

(28) 『マタイ』IV,17.